

西郷ら奄美流刑の実像 罪人と島民の知られざる暮らしをひもとく 箕輪優

2018/6/5付 | 日本経済新聞 朝刊

西郷隆盛は主君である薩摩藩主、島津斉彬の死後、奄美大島で3年にわたる幽閉生活を送った。ひとたび鹿児島に召喚されるも、斉彬の弟の久光の命に背いたかどで今度は徳之島と沖永良部島への流刑に処された。小説やドラマなどでよく知られる史実だろう。

奄美群島には西郷をはじめ、明治初期までにおびたしい数の罪人が流された。だが彼らがどういう経緯で遠島に配流となり、いかなる生活をしていたのか。そして島民たちは流人らをどのように受け入れていたのかは、ほとんど知られていないのが実態だ。

§ § §

薩摩藩の「植民地」

私は公務員を定年退職後、奄美流人の研究を始めた。興味を持ったのは、自分が奄美大島の出身だからである。家系図を作製した際、おのずから島の歴史を学ぶことになった。そのときに奄美が薩摩藩の“植民地”として搾取の対象となっていたこと、加えて罪人を流す島々になっていたことを、恥ずかしながら初めて知ったのだった。



流罪となった西郷隆盛が暮らしした家は奄美大島に今も残る（鹿児島県龍郷町）



奄美群島は1609年、薩摩藩が琉球王国を征服した際に、藩の支配下に置かれた。島民はサトウキビを耕作させられ、逆らう者は極刑に処された。人々がそんな過酷な生活をしている島に、本土で罪を犯した者が次々に送られてくる。

§ § §

島の文化向上に寄与

史料を見ると、流人の過半は武士階級で、藩のお家騒動に敗れた“政治犯”だ。次いで多いのが、素行の悪い子弟が教育あるいはせつかんのために島流しになる例。犬神やキリシタンなど禁じられた宗教を信仰したとして流された者も多い。

彼らは島の厳しい環境で自活を求められた。政治犯になるような武士は高い教養を身につけていたから、島民に読み書きを教えて口を糊（のり）した。流人は島の文化向上に寄与したのである。その代表例が薩摩藩土の名越左源太（なごやさげんた）だ。

名越は1849年に、いわゆる「お由羅騒動」で失脚した身分の高い武士である。奄美大島で約5年にわたる謹慎の身となったが、清廉な人柄で島民の尊敬を集めた。

住まいとして一軒家を提供されると「広すぎる」と恐縮し、近所の老人がハブにかまれると菊油を与えた。子供たちに学問を教え、島民たちと月見を楽しんだ。島の暮らしをつぶさに記録し、後年、「南島雑話」という地誌にまとめている。

§ § §

物語と異なる「英雄」

実は名越と対照的なのが西郷だった。西郷は名越の10年後に奄美に流罪となるが、当時の書簡を読むと、物語で描かれているのとは異なる実像がうかがえる。

島民をさげすみ、娘たちの手の甲のいれずみをばかにし「もっとまともな家に住ませろ」と訴えた。後年、明治政府の重鎮となったときに「奄美の砂糖を困窮する鹿児島県士族の救済に使えばよい」と説いた。島民搾取の現実を目の当たりにしながらこういう考えだったのを知ると、私は西郷を英雄と単純にたたえる気持ちになれない。

最も長い流人生活を送ったのは奄美大島で65年間を過ごした信濃飯田の虎蔵で、1734年に没した。温暖なので流人は総じて長生きである。島抜け、すなわち脱走は確認できたものだけで2件5人しかない。捕まれば死罪だったから、諦めて運命を受け入れる者が多かったのだろう。

私は退職後、大学院で歴史学を学び、研究に力を注いできた。だが奄美流人に関する史料はほとんど残っていない。薩摩藩の行政文書は維新直後の混乱期にことごとく焼却されたようだ。どんな意図で奄美支配に関する文書が焼却されたのか不明だが、南西諸島史の隠滅は惜しまれる。

私は住まいのある東京からたびたび奄美群島に飛び、郷土史家の協力を得ながら調査をした。運良く個人が持つ文書を見せていただいたこともある。研究は現地の空気を感じながら進めたいと思った。私が奄美の出身者であると知ると、島の人々は本当に親切に協力してくれた。奄美人の優しさと温かさに触れるフィールドワークだった。

私が調べた流人は延べ335人。武士階級以外の者は存在の痕跡すら確認できないので、この人数は全体のごく一部だろう。研究の結果を「近世・奄美流人の研究」（南方新社）という一巻にまとめた。奄美の知られざる歴史を伝える縁（よすが）となればうれしい。（みのわ・ゆう＝郷土史研究家）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.